

障害のある子どもの教育の在り方に関する研究班
専門研究A

「特別支援教育における
ICF-CYの活用に関する実際的研究
(平成20～21年度)」

平成20年度研究進捗状況及び
平成21年度研究概要報告

本研究の背景

- 教育におけるICF-CYの活用の方向性として以下のようなことが考えられる。(徳永ら、2008)
 - ・個別の教育支援計画等における実態把握のためのICF-CYの項目活用
 - ・多職種間連携のための共通言語としての活用
 - ・情報と課題の整理及び支援計画作成のための「ICF関連図」活用
 - ・診断名ではなく、生活の中でのニーズを整理する視点に基づいた小・中学校等での児童生徒理解と支援のための活用(センター的機能での活用を含む)
 - ・環境面への配慮の視点と介入後の効果判定へ活用
 - ・電子化ツールによる簡便且つ効率的な活用
- 教育においては、ICF以上にICF-CYの活用が支持される(塚、2008)

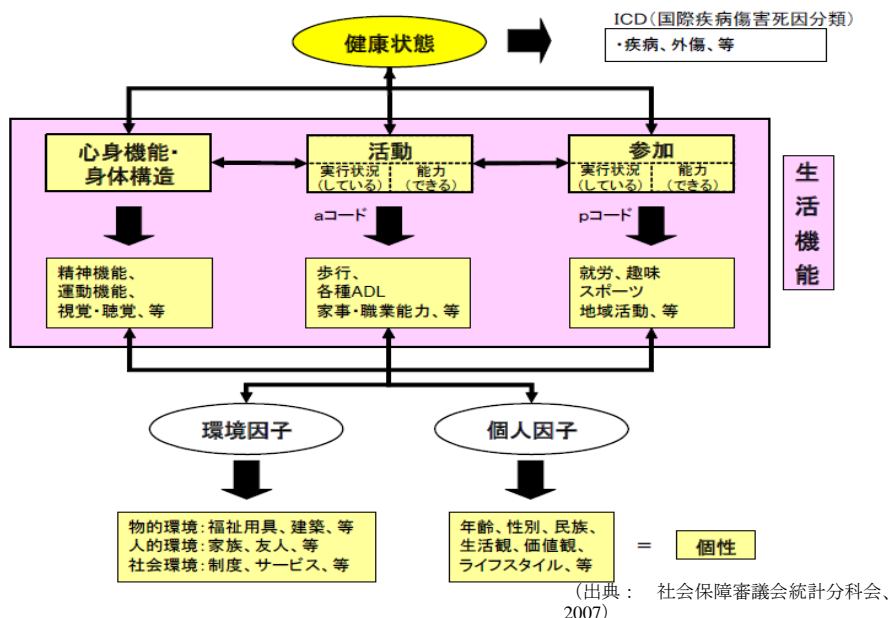
(続)本研究の背景

- これまでのICF-CY活用は、一部の学校や教員による活用の範囲を出ず、実際の、具体的な活用方法論検討が必要。具体的内容は以下のとおり。(徳永ら、2008)
 - ・実用性の高い、学校現場等の目的にそったICF-CYの項目のセット(コアセット)の開発
 - ・評価基準の検討と手引きの作成
 - ・ICF-CY及びその活用についての幅広い理解啓発
 - ・活用のための研修パッケージ開発 等
- 中教審答申(2008.1)で特別支援学校の教育課程改善におけるICFの必要性について言及され、学習指導要領等で何らかの関連記述があり、その後、さらに活用ニーズが高まることが予測されること
- ICF-CY日本語訳が2008年度中に刊行される予定であること

(参考)新学習指導要領等解説書案におけるICFの位置づけ

- 「障害のとらえ方と関連づけるものとして」
(同自立活動編案)
 - 「個別の教育支援計画での関係者間での実態把握と共通理解の参考として」
(同総則編)
- (特別支援学校学習指導要領等解説書案より抜粋・要約)

(参考)解説書案に引用された、具体例が入った概念図



本研究の目的

特別支援教育における具体的な ICF-CYの活用方法論を明らかにし、併せてそのためのツールの開発を行うことを通して、学校現場での実際の活用に寄与するとともに、障害のある子どもの教育に今後の在り方について提言を行うこと。

本研究の基本コンセプト

「ICF-CYの教育への活用の方向性を探る」

@「ICF児童青年期バージョンの教育施策への活用に関する開発的研究(18~19年度)」

すなわち、**ICF-CY→教育**



「特別支援教育の文脈で、ICF-CYが実際にどのように活用できるのかを検討する」@本研究

すなわち、**ICF-CYありきではない、**

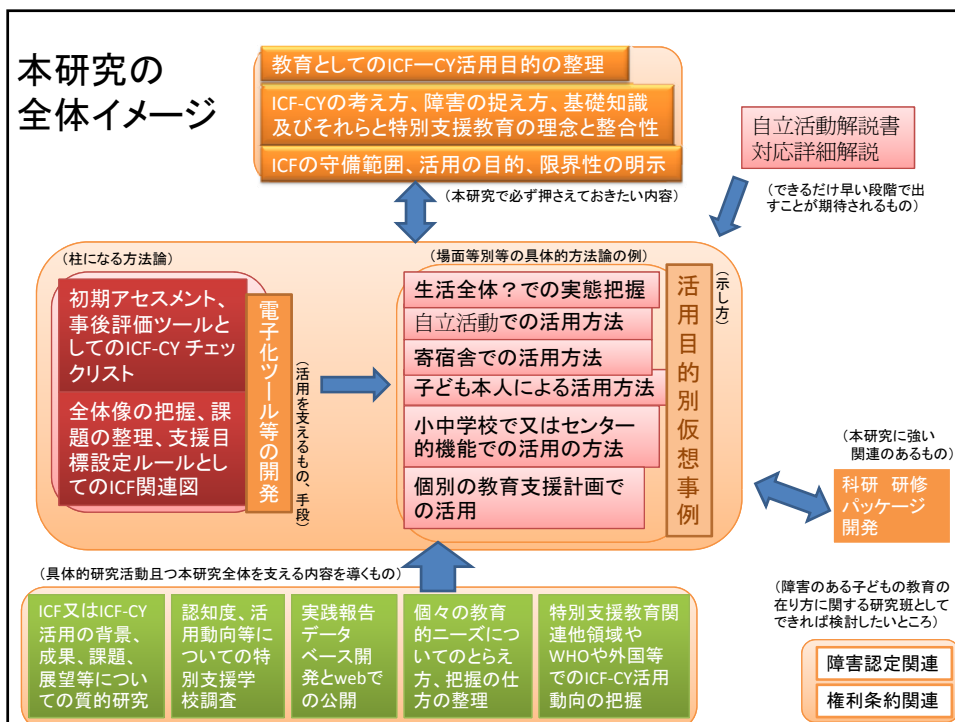
特別支援教育→ICF-CY

研究方法

- 先行研究や関連情報の収集のための文献研究
- 特別支援学校や関連機関でのフィールドワークを通じた資料収集と方法論試案の実証
- グループインタビュー等を通じた質的研究
- 特別支援学校におけるICF/ICF-CYに関する認知度等に関する、記述式質問紙郵送による調査研究
- 研究所内分担者・所内外協力者・協力機関・研究パートナーによるメーリングリスト、SNS、電話、研究協議会等を介した協議
- 科学研究補助金研究「特別支援教育における国際生活機能分類児童青年期版活用のための研修パッケージ開発」との連携
等

研究内容

- 先行研究や関連情報の収集・検討と、それらに基づいた実践研究データベース作り
- 特別支援教育におけるICF/ICF-CY活用の背景、目的、成果、課題等に関する検討
- 特別支援学校におけるICF/ICF-CYに関する認知度、活用状況、課題等について現状把握と分析
- ICF-CYの活用方法の検討と活用を支えるツールの開発
- 幅広いケースへの活用事例の蓄積
- 学習指導要領手引き書等への提供可能な資料の蓄積
- 今後の障害のある子どもの教育の在り方についての検討



研究組織

<所内スタッフ>

(研究代表者)

徳永亜希雄(Web担当兼任)

(分担者)

松村勘由(副代表)、渡邊正裕

(協力者)

大内進、小松幸恵、菊地一文、猪子秀太郎、横尾俊

(平成21年度研究研修員)

加福千佳子、小林幸子

研究組織

<研究協力者氏名(所属)>

大久保直子氏(たすく株式会社)

大関 毅氏 (茨城県立協和養護学校)

齊籐 博之氏(山形県立上山高等養護学校)

佐藤 久夫氏(日本社会事業大学)

下尾 直子氏(日本女子大学大学院)

田中 浩二氏(のあ保育園・九州大学大学院)

富山比呂志氏(茨城県立つくば養護学校)

達 直美氏(三重県立城山特別支援学校草の実分校)

(続)研究組織

<研究協力機関>

東京都立墨東特別支援学校

静岡県立中央特別支援学校

静岡県立西部特別支援学校

<研究パートナー>

秋田県立勝平養護学校

静岡県立御殿場特別支援学校

福井県立南越養護学校

20年度研究活動経過

- 週1回程度の所内分担者会議(月に1回程度、協力者も参加)の開催
- ML・SNS等での協議(随時)
- 研究協議会による検討(8月、2月、3月、含むフォーカスグループインタビュー実施)
- 特別支援学校等でのフィールドワーク
- 文部科学省、厚生労働省等の関連機関・関係者と協議
- ICF-CY国際会議での資料収集と研究成果等の発表
- 新学習指導要領解説書案詳細説明案の検討
- 研究紀要や一般雑誌での研究成果の一部公表

(参考) 障害のとらえ方とICFと学習指導要領

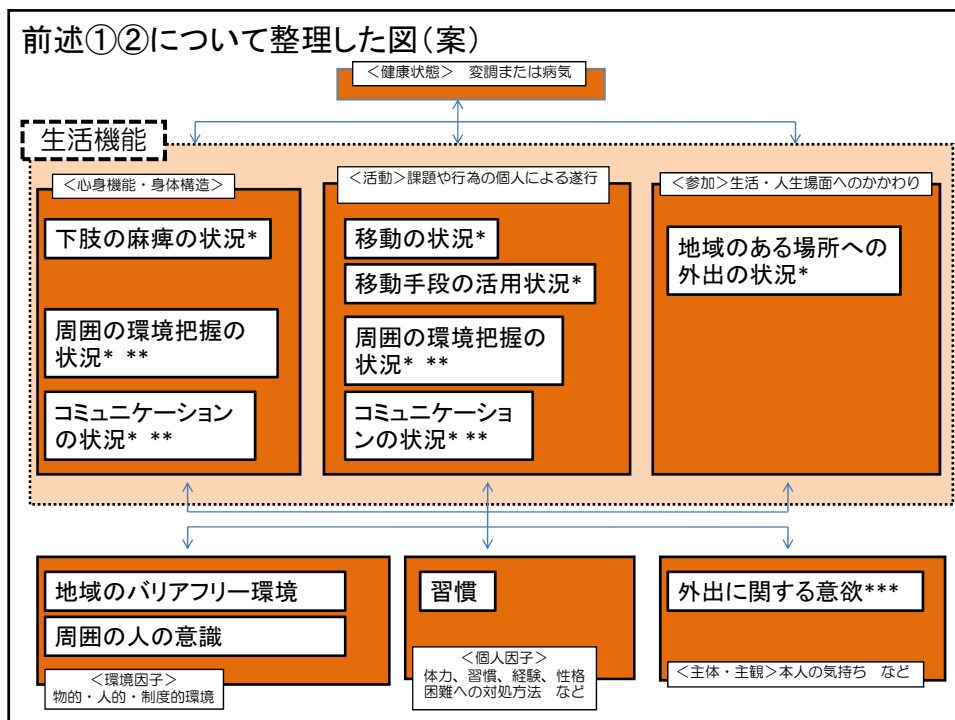
- 特別支援教育での指導の対象となる「障害による学習上又は生活上の困難」は、ICFとの関連でとらえることが必要。
- すなわち、「心身機能・身体構造」、「活動」、「参加」といった生活機能とそれらに障害のある状態を相互に関連させながら把握することが大切。
- そして、「個人因子」や「環境因子」等とのかかわりなども踏まえて、個々「学習上又は生活上の困難」を把握したり、その改善・克服を図るための指導の方向性や関係機関等との連携の在り方などを検討したりすることが求められる。

(特別支援学校学習指導要領等解説書案より抜粋・要約)

(参考) 自立活動解説書案詳細説明案についての検討

(記載事例) 下肢にまひがあり、移動が困難な児童が、地域のある場所に外出をできるようにする指導を行う際の留意点

- ① 本人のまひの状態や移動の困難にだけ目を向けるのではなく、移動手段の活用、周囲の環境の把握、コミュニケーションの状況などについて実際に行っている状況や可能性を詳細に把握すること
- ② このような生活機能と障害に加えて、本人の外出に対する意欲、習慣等や地域のバリアフリー環境、周囲の人の意識等を明らかにすること
- ③ 生活機能と障害に個人因子や環境因子がどのように関連しているのかを検討すること



(前頁図の補足)

- 関連図の枠組みは大久保(2006)を元に作成))
- * 実際に行っている状況に加えて、可能性についても把握
- ** 周囲の環境把握の状況及びコミュニケーションの状況に関する内容は、「心身機能・身体構造」「活動」の双方に含まれると判断し、併記
- ** 意欲について、解説の中では個人因子として整理されているが、ここでは「主体・主観」の枠に整理

21年度(最終年度)の研究活動概要

- 活用方法論素案の実証的検討と試案の提案
- 特別支援学校におけるICF/ICF-CYに関する認知度、活用状況、課題等についての記述式質問紙郵送による調査
- 特別支援教育における教育課題とICF-CY活用について検討する、特殊教育学会自主シンポジウム開催
- 実地調査、研究協議会等の実施
- 研究の総括と研究成果報告書作成

引用文献・資料

- 1)徳永亜希雄、笹本健、大内進、萩元良二、西牧謙吾、渡邊正裕：本研究の成果と課題、今後の展望、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所：「ICF児童青年期バージョンの教育施策への活用に関する開発的研究(18～19年度)」研究成果報告書、pp157-158、2008.
- 2)堺裕：ICF-CYを教育に活用する妥当性、前掲書、pp43-51.
- 3)中央教育審議会：幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)、p136、2008.
- 4)文部科学省、平成20年度新教育課程説明会資料②(特別支援学校)小学部・中学部各教科・道徳・外国語活動・総合的な学習の時間・特別活動・自立活動、pp178-182、2008.
- 5)文部科学省、平成20年度新教育課程説明会資料①(特別支援学校)幼稚部・小学部・中学部総則、p107、2008.
- 6)社会保障審議会統計分科会：第11回同会議 資料12 生活機能分類の活用に向けて(案)、2007.
- 7)大久保直子：大久保直子：ICF関連図の作成手順マニュアルを検討した取り組み、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所編著：ICF及びICF-CYの活用試みから実践へー特別支援教育を中心にー、ジヤース教育新社、pp110-117、2007.